

美術の資質・能力を育む授業の工夫

竹内 まな

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

平成26年度から平成28年度の3か年は、『深く考える授業』の創造』という全体研究主題の基、「美術の基礎的な力を伸ばす授業の工夫」を研究主題とし、美術の基礎的な力を伸ばすことを目指し、それまでの取組を継続して題材と指導の工夫に取り組んだ。特に2,3年次には、全体研究において深く考えるための手だてとして掲げられた「視点を変える活動」を取り入れた授業を行った。その結果、表現と鑑賞の学習において、友だちと意見を交流したり、資料を用いることで知識と出会ったりするなどして視点を変えることにより、よりよいものを目指して試行錯誤する生徒の姿が見られるようになってきた。

平成29年度から平成31年度の3か年は、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、造形的な見方・考え方を働かせた学びに着目した題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力を見取ることについて研究を行った。その結果、授業構成とワークシートの2点を工夫することにより、生徒自身の学習調整を促してきた。

令和3年度は、全体研究において『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』という主題の基、未来を切り拓く生徒に必要と考えられる「自ら問い続ける力」と「創造性」に着目し、「主体的な学び」のプロセスモデルやその評価について研究を行っていく。

(2) 生徒の実態

生徒たちは、情報通信技術の発達により豊かな視覚情報のなかで生活している。インターネットを利用し検索することで簡単に情報が入手できる一方で、自分独自のものを生み出すことが難しくなっていると感じる。また、多様な情報が発信されているにもかかわらず、画一的な価値観が主流となっていたり、特定の価値観を絶対的なものと受け止め、捉えなおす機会そのものが失われてしまったりしている様子も見受けられる。

生活面においては、失敗することを恐れたり、また自分で試すことなく正解を求めたりする姿がたびたび見られる。失敗を恐れることで、失敗して学ぶという経験が少なかったり、最短で正解することに重きを置くことで試行錯誤する経験が限られていたりすることが考えられる。

学習活動においては、概して意欲が高く主体的に取り組もうとする。美術科の学習においても、課題の内容や取り組み方がわかると積極的に取り組む。表現の学習では、自ら感じ取ったことや思ったことなどを基に描いたりつくったりする。また、見る人や使う人の立場に立ってデザインや工芸などに表現したりする。鑑賞では、自由に考えを述べる雰囲気をつくることで、作品から豊かに感じ取り、自分が感じたことを言葉にし、友達と意見を交換することができる。また、日常的に美術に触れる機会があり、山梨県立美術館など美術館を訪れた経験のある生徒も比較的多い。一方で、美術の授業を通して身に付けたい力や目指すところなどを理解し、取り組んでいる生徒は少ないように感じている。そのため、学んだことを日常生活で生かす経験も限られているようである。

このような生徒に対して、よりよいものをめざして試行錯誤を続ける態度を育てるとともに、造形的な視点を持ち、生活や社会の中で美術、美術文化などと豊かに関わる資質・能力をさらに伸ばしていきたいと考えている。

(3) 全体研究主題より

①美術科で育成する「創造性」について

全体研究において「創造性」は、①課題の解決に向けて②これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて活かし、③新たな価値を創り出すために必要な資質・能力だと述べており、これは文部科学省が示す「Society5.0を牽引する人材」の資質・能力と一致している。

ここで、「造形的な見方・考え方を働かせた学び」について目を向けてみる。美術科の特質に応じた物事

を捉える視点や考え方である造形的な見方・考え方とは、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくり出すことであり、これこそ美術科で育成する「創造性」であると考えます。

②美術科における「主体的な学び」のプロセスモデルの実践

美術科ではこれまでも、学習指導要領の美術科の目標で示された(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」の関連を明確にした授業計画について研究してきた。その中で明らかにしてきた授業づくりの要素を活用することが、プロセスモデルの実践につながり、そして前述した「創造性」を育むことができると考える。授業づくりの要素として、「問いをもつことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートと生徒への働きかけ」の三つを掲げてきた。特に、生徒の実態を把握し、それに合った題材を検討することで精選される「問いをもつことのできる題材」により、生徒自身が問いをもち、その解決に向けて主体的に取り組むことができると考える。

(4) 本年度の研究主題

「1 (1) これまでの本校美術科の研究」でも述べた通り、平成29年度から平成31年度の3か年は、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、研究を行ってきた。

このとき全体研究においては、見方・考え方を働かせた学びと、それによって育まれた資質・能力を見取るための評価の工夫、そして教科等横断的な教育課程の編成の大きく3つが内容として掲げられた。そこで美術科では、造形的な見方・考え方を働かせた学びに注目し、題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力の見取りについて研究を行い、生徒自身による自己調整を促してきた。

昨年度の研究では、「主体的な学び」のプロセスモデルを参考にして題材計画の整理を行い、「主体的な学び」の評価方法について、ワークシートなどの構成の整理や、題材や授業のねらいの明確化によって、生徒自身の主体的な学びに向かう態度が見取れるように研究を進めてきた。また、各学年における題材同士の広がりや深まりに注目して年間指導計画の見直しを行い、教科横断的な教育課程編成を目指してきた。

本年度から完全実施となった学習指導要領では、まず美術科の目標について、美術科において育成を目指す資質・能力をより明確にするため(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」に整理して示している。さらに、美術科で目指す資質・能力の育成について、目標で示されている(1)、(2)、(3)が相互に関連し合い、一体となって働くことが重要だとしている。次に、教科の目標と資質・能力の関係については、次の表1のように表されている(「平成29年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」p.17より抜粋)。この表を基に、これまでの学習のねらいや評価について、新学習指導要領によるものとの対応や整合性を検討しながら取り組んできた。

表1 教科の目標と資質・能力の関連

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	(1)対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、	表現方法を創意工夫し、創造的に表わすことができるようにする。(創造的に表現する技能)
思考力、判断力、表現力等	(2)造形的なよさや美しさ表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、(発想や構想と鑑賞の双方に重なる資質・能力)	美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。(鑑賞に関する資質・能力)
	主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、(発想や構想に関する資質・能力)	
学びに向かう力、人間性等	(3)美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。(全ての指導項目)	

このような学習指導要領の改訂と昨年度の研究を踏まえて、課題として考えられることは二つある。

一つ目の課題は、分かりやすい題材の学習目標（ねらい）の設定である。創造的で主体的な学習活動を実現するためには、「問いをもつことができる題材」でなければならない。問いの解決に向かおうとすることが、主体的な学習活動に結びつくと考えられるからである。そのためにはまず、ねらいを明確にし、生徒と共有する。生徒がねらいに向かって主題を生み出し、それを作品に実現するための問いを自身に投げかける場面が生まれるように工夫する。そのことによって、主体的に、知識を活用させるなどしながら構想したり技能を働かせたりすることができ、結果として創造的な学習活動が実現するからである。

二つ目は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価である。「主体的に学習に取り組む態度」は「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を発揮し、身につけようとする態度とすることができる。したがって、資質・能力の相互の関係を整理しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成し、その上で「題材の評価規準」を作成することに取り組み、実際の学習活動からの見取りや評価材を評価した際の成果と課題を明らかにし、さらに研究を深める。

これらのことから、本年度美術科では、研究主題を「美術の資質・能力を育む授業の工夫」とし、教科の目標で示された（１），（２），（３）を相互に関連付けた授業を行うとともに、その中で育まれた資質・能力の見取りについて明らかにする。

2. 研究の目的

生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で「造形的な見方・考え方を働かせる」ことをとおして、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況等を、自ら把握し、学習を調整しながら主体的に学習に取り組む態度を養う。

3. 研究の内容

- ① 生徒が「思いや意図」をもち、主体的に課題に取り組めるような題材を設定する。
 - ・主体的に意欲をもって表現や鑑賞の学習ができるような題材や授業の開発
- ② 美術科の目標で示された（１），（２），（３）の関連を明確にした授業計画を立てる。
 - ・ねらいや学習内容などが整理できる，言語活動やワークシートの工夫
 - ・PDCA サイクルの中で，より主体的に学習ができるような授業づくり
- ③ 授業により育まれた資質・能力の見取りについて実践を重ねる。

4. 2か年の研究の見通し

2年目である令和3年度は，1年目の実践を基に，進めてきた美術科で育成する「創造性」について整理するとともに，「主体的な学び」のプロセルモデルの実践及び「主体的に学習に取り組む態度」の評価について研究を進め，授業改善とともにさらなる評価方法の整理を行うこととする。

5. 参考文献

教育課程部会教育課程企画特別部会（2016）「各教科等別ワーキンググループ等の議論の取りまとめについて」

国立教育政策研究所 教育課程研究センター（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学校 美術）」

国立教育政策研究所 教育課程研究センター（2011）「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 美術）」

永関和雄・安藤聖子編著（2018）「平成29年度改訂 中学校教育課程実践講座 美術」

福本謹一・村上尚徳編著（2017）「平成29年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」

文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説 美術編」

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説 総則編」

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説 美術編」

山梨大学教育人間科学部附属中学校（2015）「平成26年度 研究紀要」

山梨大学教育人間科学部附属中学校（2016）「平成27年度 研究紀要」

- 山梨大学教育学部附属中学校 (2017) 「平成 28 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2018) 「平成 29 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2019) 「平成 30 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2020) 「令和元年度 研究紀要」